小学社会通信　2016年 秋号

まなびと

もくじ

次期学習指導要領が目ざす社会科の「資質・能力」とその評価のあり方 …… 鋒山泰弘　2

実践紹介

4年　よりよい社会の形成に参画する資質や能力を育てる
－単元「昔から今へと続くまちづくり」で扱う震災復興－ …… 橋爪純子　8

4年　私立学校の地域学習の課題と可能性
－深大寺用水と富沢松之助を通した単元「昔から今へと続くまちづくり」－ …… 鈴木崇資　12

5年　鎌倉材木座海岸のしらす漁
－地域の素材を活用した単元「水産業のさかんな地域」の学習－ …… 髙橋岐明　18

6年　社会に対する認識と判断を深める社会科学習
－新時代を創る若い武士たち・明治維新－ …… 前田晴雄　22

教育出版

次期学習指導要領が目ざす社会科の「資質・能力」とその評価のあり方

追手門学院大学　鋒山（ほこやま） 泰弘（やすひろ）

1 「資質・能力の育成」の強調と学習指導要領の改訂

これまでの学習指導要領の改訂では，まず校種別・教科別の専門部会において，改訂の方向性の審議が開始され，その結果を教育課程部会等でまとめていく形で審議がされてきた。しかし今回の改訂では，まず教育課程企画特別部会が設置され，そこで教育課程全体の目ざすべき方向性が審議され，学習指導要領改訂の中核となる部分が定められ，その後に校種別・教科別の専門部会で審議を始めるというプロセスがとられている。教育課程企画特別部会は2015年８月に改訂の方向性を「論点整理」という形でまとめ，それを受けて各分野のワーキンググループで育成すべき資質・能力等の議論が進められてきた。このような手続きがとられた背景には，今後社会が激しく変化するなかで，これからの時代に生きていく子どもにどのような力が求められるのかについて，教科等の枠を超えて議論し，教育課程全体を通して育成を目ざす資質・能力のあり方を明確にしたいという文部科学省の意図がある。

教育課程企画特別部会の「論点整理」では「将来の変化を予測することが困難な時代」を生きていく子どもに「学校は何を準備しなければならないのか」という問いが設定され，それに対して，「教育を通じて，解き方があらかじめ定まった問題を効率的に解ける力を育むだけでは不十分である」等という課題をあげ，「膨大な情報から何が重要かを主体的に判断し，自ら問いを立ててその解決を目ざし，他者と協働しながら新たな価値を見出していくことが求められる」等について言及されている。

現在の学習指導要領のもとでの言語活動や体験活動の重視による学力向上の成果を認めつつ，課題としてあげられているのは，「判断の根拠や理由を示しながら自分の考えを述べたり，実験結果を分析して解釈・考察し説明したりする」力が弱いことであり，日本の子ども・青年の「自己肯定感」「主体的に学習に取り組む態度」「社会参画の意識」が国際的に見て相対的に低いことである。

そのような考察をふまえて，「論点整理」では，「育成すべき資質・能力」を以下の「三つの柱」として整理している。

ⅰ）「何を知っているか，何ができるか（個別の知識・技能）」（「社会の様々な場面で活用できる知識・技能として体系化しながら身に付けていくこと」の重要性が述べられている）
ⅱ）「知っていること・できることをどう使うか（思考力・判断力・表現力等）」（「問題発見・解決」「協働的問題解決」のために必要であることが強調されている）
ⅲ）「どのように社会・世界と関わり，よりよい人生を送るか（学びに向かう力，人間性等）」（「メタ認知」「持続可能な社会づくりに向けた態度」「リーダーシップやチームワーク」「感性」「優しさや思いやりなど」といった内容が強調されている）

次期学習指導要領では，これらの資質・能力の三つの柱全体を捉え，教育課程の構造的な見直し

を行い，教育課程は「何を知っているか」という知識の内容を体系的に示した計画に留まらず,「それを使ってどのように社会・世界と関わり，よりよい人生を送るか」までを視野に入れたものとして議論することが強調されているのである。

2 「社会・地理歴史・公民ワーキンググループ」で検討されている資質･能力

教育課程部会の中には各分野のワーキンググループが組織され，学習指導要領の改訂に向けて議論が進められてきた。以下では,「社会・地理歴史・公民ワーキンググループ」の会議資料として公開されている内容にもとづいて，社会科等で育成されるべき資質・能力についてどのような案が考えられているのか，その特徴を紹介したい。

平成28年５月18日の部会で示された「社会，地理歴史，公民で育成すべき資質・能力の整理（案）」では，小学校社会科の部分だけを示すと，表１.のような内容になっている。

この案の特徴をあげれば,「思考・判断・表現力等」においては，課題を把握するだけでなくて「社会への関わり方を選択・判断する力」という

知識や技能 （何を知っているか，何ができるか）	思考力・判断力・表現力等 （知っていること，できることをどう使うか）	学びに向かう力・人間性 （どのように社会，世界と関わりよりよい人生を送るか）
・社会生活に関する理解 （地域や我が国の国土の地理的環境，現代社会の仕組みや働き，地域や我が国の歴史，それらと人々の生活との関連） ・社会的事象について調べまとめる技能 （社会的事象に関する情報を適切に集める・読み取る・まとめる技能）	・社会的事象の特色や相互の関連,意味を多角的に考える力,社会にみられる課題を把握し，社会への関わり方を選択・判断する力 ・思考・判断したことを説明する力	・社会的事象について主体的に調べ分かろうとして課題を意欲的に追究する態度（環境保全，自然災害防止，産業の発展,先人の業績や文化遺産,我が国の政治の働き，世界の国々との関わり） ・よりよい社会を考え学んだことを社会生活に生かそうとする態度 ・多角的な考察や理解を通して涵養される自覚や愛情など（地域社会の一員としての自覚，地域社会に対する誇りと愛情，我が国の国土に対する愛情，我が国の歴史や伝統を大切にし，国を愛する心情，世界の国々の人々と共に生きていくことの大切さについての自覚）

▲表１．社会，地理歴史，公民で育成すべき資質・能力の整理（案）

考えられる視点例	社会，地理歴史，公民における思考力，判断力	視点を生かした，考察や構想に向かう「問い」の例	考察，構想した結果，獲得する知識の例
○位置や空間的な広がりの視点 地理的位置，分布，地形，環境，気候，範囲，地域，構成，自然条件，社会的条件，土地利用など	◎社会的事象の見方・考え方 ・位置や空間的な広がり ・時期や時間の経過 ・事象や人々の相互関係 に着目して社会的事象を見出し ・比較・分類したり総合したりして ・国民（人々の）生活と関連付けて 追究の方法	・どのように広がっているのだろう ・なぜこの場所に集まっているのだろう ・地域ごとの気候はどのような自然条件によって異なるのだろう	・いくつかの組立工場を中心に部品工場が集まり，工業が盛んな地域を形成している ・駅の周囲は交通の結節点なので人が多いため商業施設が集まっている ・国土の地理的位置や地形，台風などの自然条件によって気候は異なる
○時期や時間の経過の視点 時代，起源，由来，背景，変化，発展，継承，維持，向上，計画，持続可能性など	考察　社会的事象の特色や相互の関連，意味を多角的に考察する力	・いつどんな理由で始まったのだろう ・どのように変わってきたのだろう ・なぜ変わらずに続いているのだろう	・祭りは地域の豊作や人々のまとまりへの願いから始まった ・農作業は機械化により生産効率を向上させてきた ・伝統芸能は技や道具が継承されるとともに，多くの人々に受け入れられて今に至っている
○事象や人々の相互関係の視点 工夫，努力，願い，業績，働き，つながり，関わり，仕組み，協力，連携，対策・事業，役割，影響，多様性と共生（共に生きる）など		・どのような工夫や努力があるのだろう ・どのようなつながりがあるのだろう ・なぜ○○と○○の協力が必要なのだろう	・地域の安全は，関係機関の未然防止と緊急対処によって守られている ・食料生産は私たちの食生活を支える役割を果たしている ・政治には国民生活の安定と向上を図る働きがある
	構想　社会に見られる課題について，社会への関わり方を選択・判断する力	・どのように続けていくことがよいのだろう ・共に生きていく上で何が大切なのだろう	・伝統と文化は受け継ぐだけでなく時代に合わせ発展させていく必要がある ・世界の人々と共に生きるには，文化や考え方の違いを認め合い，課題を解決しながら理解し合っていくことが大切である

▲表２．社会的な見方・考え方（追究の視点や方法）の例（案）

能力が加えられていること，現行の「関心･意欲･態度」の目標＝評価規準では「よりよい社会を考えようとする」となっている場合が多いが，さらに「よりよい社会を考え学んだことを社会生活に生かそうとする態度」という表現で，学び考えたことを行動に移せる資質・能力まで教科の目標を拡張しようという志向がみられることであろう。

以上の特徴がさらに具体化されている資料として，平成28年５月26日に出された「社会的な見方・考え方（追究の視点や方法）の例（案）」がある。そこでは，次のような項目が設定され表２.の通りまとめられている。

表２.の「思考力・判断力」の欄をみると，「位置や空間的な広がり・時期や時間の経過・事象や人々の相互関係」に着目して社会的事象を見出し，「比較・分類したり総合したりして」「国民（人々）の生活と関連づけて」「社会的事象の見方・考え方」を追究した結果として，「社会的事象の特色や相互の関連，意味を多角的に考察する力」（考察）と「社会にみられる課題について，社会への関わり方を選択・判断する力」（構想）が書かれてある。「考察」（力）だけではなく「構想」（力）が，明確に位置づけられている点が新しい特徴である。

学年が上がれば目標とされる「構想」（力）の質も高いものとして想定されている。たとえば高校の新科目として想定されている「地理総合（仮称）」では，「構想」（力）の部分は，「持続可能な社会の構築のためにそこで生起する課題の解決に向けて，複数に立場や意見を踏まえて構想する力」と表現されている。

このような「構想」（力）を含む「思考力・判断力」を明確にするためのポイントは「思考し，判断する」際に，どのような「概念」（視点）が使われるかを明確にすることである。表２.の小学校社会科で「考えられる視点例」の欄では，「位置や空間的な広がりの視点」として「地理的位置，分布，地形，環境，気候，範囲，地域，構成，自然条件，社会的条件，土地利用など」，「時期や時間の経過の視点」として「時代，起源，由来，背景，変化，発展，継承，維持，向上，計画，持続可能性など」，「事象や人々の相互関係の視点」として「工夫，努力，願い，業績，働き，つながり，関わり，仕組み，協力，連携，対策・事業，役割，影響，多様性と共生（共に生きる）など」の概念があげられている。

また，そのような視点を使って思考･判断し，「考察」や「構想」に向かうためには，「問い」が明確に意識されなければならない。表２.の小学校の「視点を生かした，考察や構想に向かう『問い』の例」の欄で，「位置や空間の広がり」に対応する問いとしては，「どのように広がっているのだろう」「なぜこの場所に集まっているのだろう」「地域ごとの気候はどのような自然条件によって異なるのだろう」があげられている。また，「考察」だけではなく「構想」に対応する「問い」として，「どのように続けていくことがよいのだろう」「共に生きていく上で何が大切なのだろう」といった価値判断を含む「問い」も位置づけられている。

さらに，そのような「問い」にもとづく「考察」や「構想」の学習活動が，次の「考察」や「構想」

に生きていくためには「考察，構想した結果，獲得する知識」が意識される必要がある。表２.では，たとえば小学校の「位置や空間の広がり」で「獲得する知識」の例として「いくつかの組立工場を中心に部品工場が集まり，工場が盛んな地域を形成している」「駅の周囲は交通の結節点なので人が多いため商業施設が集まっている」などがあげられている。

このようなワーキンググループの案をみてみると，「何を教えるのか」といった「コンテンツ(知識内容)・ベース」の学習指導要領から「何ができるのか」という「資質・能力」ベースの学習指導要領に変えるという改革においても，どのような「概念」（視点）を使って子どもが「考察」「構想」できるようにするのか，「考察」「構想」した結果，次の新しい課題に活用できるどのような「転移性のある知識」を子どもに獲得させるのかというコンテンツをより深く検討しなければ具体化できないということがわかる。

3 「資質・能力の育成」を目ざす社会科の指導と評価のあり方

ワーキンググループでは，「社会科の評価の観点」についても議論がされている。平成28年5月26日の資料によれば，小学校社会について表３.のような案が提示されている。

「技能」を「知識」とまとめて一つの観点にすることで，現行の４観点から３観点にする案で，多忙な学校現場で学習評価を分析的に進めていくうえで，より実行しやすい案になっており，また資質・能力の目標化と評価を一体のものとして考える合理的なものとなっている。

現在の社会科教育においてもこのような観点＝目標（育成されるべき資質・能力）に対応した授業は創り出されている。たとえば筑波大学附属小学校における小学校３年生を対象とした「文京区コミュニティバス『Ｂ－ぐる』について考える」という実践記録（筑波大学附属小学校社会科教育研究部『筑波発社会を考えて創る子どもを育てる社会科授業』東洋館出版社，2015年，60-71頁）をヒントに，資質・能力の育成に対応した指導と評価のあり方を述べてみたい。３年生を対象に行われた授業であるが，以下の説明では６年生の児童の能力と社会科の学習内容を想定して目標と評価のあり方をイメージした説明を行いたい。実際に３年生に行われた授業は次のようであった。

社会的事象についての知識・技能	社会的事象についての思考・判断・表現	社会的事象に主体的に関わろうとする態度
社会生活について理解し，社会的事象について調べまとめる技能を身に付けている。	社会的事象の特色や意味などを多角的に考えたり，社会にみられる課題の解決に向けて社会への関わり方を選択・判断したりして，適切に表現している。	社会的事象を主体的に調べ分かろうとして，課題を意欲的に追究するとともに，よりよい社会を考え学んだことを社会生活に生かそうとしている。

▲表３．小学校社会科の評価の観点及びその趣旨（案）

第一次（２時間）：「Ｂ－ぐる」ってどんなバス（コミュニティバスについて基本的なことを学習する）。
第二次（２時間）：「Ｂ－ぐる」に乗ってみよう（校外学習の機会を利用し，コミュニティバスを利用する「共通体験」をする）。
第三次（１時間）：「Ｂ－ぐる」の運賃は100円でよいのか考える（バスの運営には区の補助金が使われていることを学習し，それは必要か否か，意見を言う。区役所の担当者の人の考えをビデオ映像でうかがう）。
第四次（１時間）：区役所の矢部さんに手紙を書く。

この授業を小学校６年生対象の授業と想定して，「知識･技能」に対応する目標を考えれば，「コミュニティバスというサービスが，地域の人々の願いによって実現し，現在多くの人に利用されている事実を理解する」（知識），「バス利用客１人あたりの必要経費と文京区から支出されている補助金の金額を調べて，区の歳出予算全体に占めるコミュニティバスの補助金支出の割合を算出する」（技能）といった内容が考えられる。この目標＝観点に対しては，ノートのまとめ等をもとに事実が正確に書けているかどうか，情報を集めてデータの計算ができ，まとめられているかで評価することになるだろう。「社会的事象についての思考・判断・表現」に関しては，「コミュニティバスのサービスの意義を理解したうえで，現在の運賃が大人も子どもも100円であることと，その運営には区の予算（税金）も使われていることに関して，自分の意見・判断をもつ」といった内容が考えられる。これに関しては，クラスでの意見交換をふまえて，自分の意見・判断をまとめた文章記述をもとに評価することになる。評価規準は当然正解が一つあるわけではなく，コミュニティバスという公共サービスに税金が支出されている意味を，多面的・多角的に考察できているかを評価することになる。「社会的事象に主体的に関わろうとする態度」に関しては，この単元の学習を通じて，「地域の公共サービスとは何か？」「地域の公共サービスの費用はどのように負担されるべきか？」という問題に対して，子どもがどこまで関心を広げて，自分の意見を形成し，発言し，関わろうとしているかで，評価することになる。「社会的事象に主体的に関わろうとする態度」は，目標として大切にされなければならないが，子どもが授業で取り上げた社会的事象に「関心や意欲を示さない」からといって，安易に数値による評価・評定を下すべきではないだろう。子どもがなぜその社会的事象に切実感を持たないかを教師が考え，教材研究を見直す契機にしたり，子どもと「何が重要な社会的事象なのか」について対話する契機として「社会的事象に主体的に関わろうとする態度」の評価を考えたりすることも重要であろう。

実践紹介　4年

よりよい社会の形成に参画する資質や能力を育てる

－単元「昔から今へと続くまちづくり」で扱う震災復興－

東京都文京区立礫川小学校　橋爪純子

1　はじめに

1995年の阪神・淡路大震災，2011年の東日本大震災，本年４月の平成28年（2016年）熊本地震など，日本各地で大きな自然災害が発生し，そこからの復興が続けられている。現在の4年生にとって「震災」とは，東日本大震災または熊本地震による震災との印象が強い。勤務校の子どもたちにとっては，東北地方やその他の被災地はなじみの薄い地域ではあるが，それぞれの復興の同時代にいる。そうした震災からの復興について考えるうえで，1923年に発生した関東大震災を学ぶ必要がある。多くの先人たちの努力によって，現在の東京や自ら住む地域の基盤が築かれていることを理解させたい。学習を通して社会的事実を知り，先人の努力や願いを理解し，現在のまちがあることに誇りと愛着をもってほしい。さらには，自分が何をすべきか，ということを考えさせたい。

2　教材について

東京都発行の社会科副読本『わたしたちの東京都』の2015年度版より，「郷土の発展につくす」単元で扱う先人として，後藤新平が取り上げられている。これまで「安全なくらしとまちづくり」単元で消防の仕事などについて学習し，『総合的な学習の時間』では防災学習を実施してきた。そうした背景から，震災復興の教材を既習内容と関連づけてとらえやすいと考えた。これまで適切な教材が開発されてこなかった後藤に関して，副読本では精選された内容となっており，この教材を中心に読み取らせていく。

後藤新平は1857年に岩手県に生まれた医者である。医者として板垣退助の治療にあたるなどして，国政に関係していき，政治家となった。関東大震災発生当時は内務大臣を務め，東京市長（現在の東京都知事にあたる）を兼務していた。壊滅的な被害を受けた東京を復興させるために，当時の金額で30億円にもおよぶ予算を想定したが，結果として７億円程度でこの復興事業にあたった。人々は後藤のことを「大風呂敷」と批評した。強権的な一面もあったが，復興への道筋や人脈の利用の仕方などについての先見性や，思い切った政策を実行するリーダーシップという点で，学習の参考となる人物である。後藤はこの復興を計画し，さまざまな分野の専門家に協力を要請しつつ復興事業を実施した。

3　子どもの実態

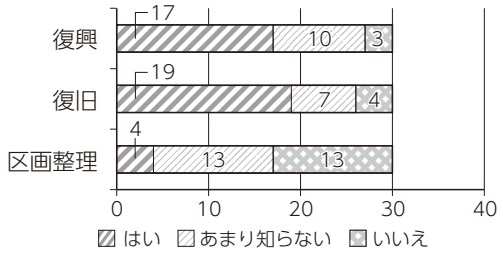
学習にあたって，事前に子どもたちの知識や意識についてアンケートし，その結果をもとに分析した。

Q１．次の地震について知っていますか。また，それはいつのころのことでしょうか。

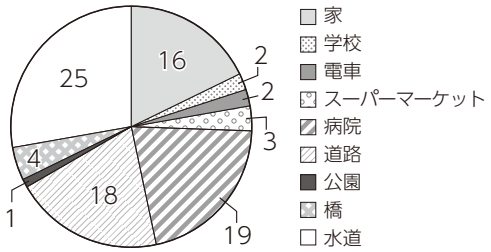
主な地震災害の発生時期	正答率
関東大震災（1923年）	30%
阪神・淡路大震災（1995年）	13%
新潟県中越地震（2004年）	16%
東日本大震災（2011年）	57%

2011年に発生した東日本大震災の名称はよく知っているが，知識としては十分ではない。

Q２．次の言葉（復興，復旧，区画整理）を知っていますか。



▲Q２. の回答結果



▲Q３. の回答結果

予想よりは「復興」「復旧」の言葉を知っていた。東日本大震災の影響もあると思われる。「区画整理」については，具体的な説明が伴わないと難しいと思われる。

Q３．地震が起きて，わたしたちのまちは足の置き場もないほどにぐちゃぐちゃになってしまいました。あなたが，まちをもとのすがたにもどすとしたら，次のうち何からもどしますか。（一人につき３つ回答）

一学期に防災の宿泊体験をしていることもあり，災害時の「水の確保」という意識は高い。続いて「道路」の復旧が多かったが，「橋」に対しての回答が少ないことから「道路」と「橋」が子どもたちのなかでつながりにくいことがわかる。また，「公園」は子どもたちにとって「遊び場」であり，「避難する場所」という意識はほとんどないようである。

4　学習のまとめについて

単元の指導計画は次のページの通りである。第四次（10時）では，学習のまとめとして，「もし，後藤新平が復興祭に出席していたら，どのような言葉を言っただろう。また，後藤の思いを引き継ぐために自分たちができることは何だろうか。」と課題を設定して，新聞にまとめさせた。以下に，子どもたちの主な感想を紹介する。

①学習して思ったこと

・「学習をすすめていくうちに，後藤新平は偉大な人だと思った。後藤新平がいなかったら，たぶん東京はこのような日本の中心となる場所にならなかったと思う。」

・「最後まであきらめずに復興したのはすごいと思いました。」

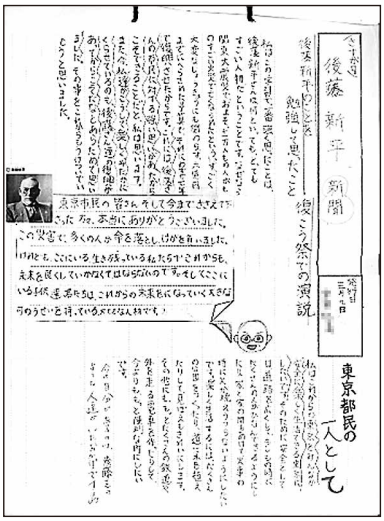
②復興祭に参加していたら，どんな演説をしたのだろう。

・「東京市民のみなさん，そして，今まで支えて下さった方々，ほんとうにありがとうございました。この災害で多くの人が命を落とし，けがを負いました。けれども，ここにいる生き残った人たちでこれからも未来をよくしていかなくてはならないのです。そして，ここにいる子どもたち，君たちはこれからの未来を担っていく大きな可能性をもっている大切な人材です。」

・「（前半略）みなさんで，安全で，使いやすい未来を作りましょう。」

③東京都民の一人として何ができるだろう

・「わたしは東京都民の一人として，だれでも住



▲学習をまとめた新聞

単元の指導計画

段階	時間	ねらい	学習活動・子どもの反応	資料　☆評価
つかむ	1	関東大震災とはどのような災害だったのか，近年の地震災害と比べてみよう。		
		近年発生した震災では，人々が何に困っているのかを考え，どのように復興がなされているのかを知る。関東地方にも震災があったことを伝える。	東日本大震災とその被害 関東大震災とその被害 文京区での被害（文京区も被害を受けたが，本校周辺はかろうじて免れた） ⇒学校ごとに比べる	東日本大震災の写真／被害状況データ 関東大震災の写真／被害状況データ 関東大震災の火災被害があった地域を示す地図（文京区の位置を示す） ☆関東大震災により，東京都にも大きな被害があったことについて関心をもっている。
	2	関東大震災からの復興にあたった後藤新平（ごとうしんぺい）とは，どのような人物なのだろう。		
		関東大震災の事実を知り，復興に力を尽くした後藤について知る。	後藤の生い立ち，業績の歴史を知る（政治家のほかに医師であったことを伝える）	後藤の写真 後藤の生い立ちの年表（「医師」「政治家」「市長」などの肩書を追う） 後藤のドキュメント動画 ☆後藤に関心をもち，人物像や業績について予想している。
	3	後藤新平は，限られた条件のなかで復興事業をどのような考えから，どのようにすすめたのか予想しよう。		
		後藤は限られた条件のなかで，復興事業をどのような考えから，どのようにすすめたのかを予想する。	関東大震災の後，自分ならばどのように復興させるのか考える。 「水が必要だ」「物を運ぶのに道が必要」「仮設住宅が必要」 後藤の計画とその予算を知る。それぞれの計画について，どのように復興させたのか予想する。	復興事業計画 復興予算の変化 ☆後藤の復興計画に関心をもち，どのような考えから，どのように復興させようとしたのかを予想している。
調べる	4	復興事業の一つ「区画整理」について知るとともに，後藤新平の思いや願いを考える。		
		復興事業の道路計画について知る。	昭和通りの変化の写真２枚 区画整備前と区画整備後の図を比較して，どのように対処したのか予想する。	昭和通りの変化が分かる写真 後藤の計画した道路図 （現在も受け継がれていること） ☆資料を見比べ必要な情報を読み取り，後藤らの考えを想像している。
	5	復興事業の一つ「橋の建設」について知るとともに，後藤新平の思いや願いを考える。		
		復興事業の橋や公園の整備計画について知る。	永代橋（えいたいばし）の写真２枚 公園の写真を比較して,どのように対処したのか予想する。	永代橋の写真２枚 ☆資料を見比べ必要な情報を読み取り，後藤らの考えを想像している。
	6	復興事業の一つ「下水道や建物の整備」について知るとともに，後藤新平の思いや願いを考える。		
		復興事業の下水道や建物の整備計画について知る。	浸水した街の写真からどのような問題が想像でき，どのように対処したのか予想する。	浸水した街の写真 計画した図 ☆資料を見比べ必要な情報を読み取り，後藤らの考えを想像している。

段階	時間	ねらい	学習活動・子どもの反応	資料　☆評価
調べる	7	復興事業の一つ「復興小学校の建設」について知るとともに，後藤新平の思いや願いを考える。		
		後藤がどのような願いを込めて学校を復興させたのか知る。	礫川小学校と明化小学校とのちがいを比べ，どのような考えから復興小学校が建設されたのか予想する。	創立当時における礫川小学校と明化小学校の写真（玄関，廊下，窓など，ちがいのわかる部分） ☆資料を見比べ必要な情報を読み取り，後藤らの考えを想像している。
	8	後藤の業績は東京の都市基盤となっており，その理念は現在の都市計画にも受け継がれている。	道路計画の地図から，後藤の考えが現在でも受け継がれ計画されていることを知る。	☆後藤の理念は，現在の東京の都市計画にも受け継がれていることを知る。
まとめる・深める	9・10	後藤たちの取り組みと，後藤の遺志を受け継ぐために自分たちがすべきことを考え，新聞にまとめる。		☆後藤たちの遺志を受け継ぐためにも，自分たちがすべきことを考え，新聞まとめている。

みやすく安心で優しいまちにしたいです。」

・「次に大きな震災が起きたら，後藤新平を見習って自分たちで復興できるようにしたい。(中略)この大きな震災を子孫にも伝えていきたいと思います。」

・「いろんな人と人が助け合って，このまちを大切にしたいと思います。」

5　授業を終えて

成果と課題

副読本における後藤は，新たに開発された教材である。東京都社会科研究会が資料を集め，思いを込めて教材化したことが感じられる。東日本大震災という大きな災害が発生し，また，私自身も後藤を知れば知るほど，子どもたちに伝えるべき人物だと強く感じた。その意味で，この教材を一定の時間をかけて追究できたことは成果であった。後藤になったつもりで，「わしは…」の発言から始まる子どもの発表も，回を重ねるごとにその重みが増し，理解が深められた様子がうかがえた。また，文京区内にもいわゆる復興小学校があることや，都内各地にも復興事業によってつくられた場所があることを知り，東京都に対しての愛着がわいたことが読み取れた。特に，東京都に住む一人としての使命感をもたせられたことは,「まとめる」段階の新聞からも読み取れた。そこから，後に続く「わたしたちの都道府県」単元への関連づけを図ることもできた。

一方，課題としては新しい教材だけに先行する実践がないという点がある。大人向けの書籍や資料は多数あるが，小学生向けに教材化されたものがほとんどない。つまり，この教材で「調べる」という作業が難しいのである。今回の実践では，教師が用意した比較資料から，後藤の思いを読み取るという作業を行った。国語科や教科化された道徳でもない社会科として，それでよかったのだろうかという疑問が残された。今後の実践上の課題としたい。

私立学校の地域学習の課題と可能性

―深大寺用水と富沢松之助を通した単元「昔から今へと続くまちづくり」―

晃華学園小学校教諭　鈴木崇資

はじめに

小学校社会科の学習指導要領では，第３学年及び第4学年の目標として，「（１）地域の産業や消費生活の様子，人々の健康な生活や良好な生活環境及び安全を守るための諸活動について理解できるようにし，地域社会の一員としての自覚をもつようにする。（２）地域の地理的環境，人々の生活の変化や地域の発展に尽くした先人の働きについて理解できるようにし，地域社会に対する誇りと愛情を育てるようにする。（３）地域における社会的事象を観察，調査するとともに，地図や各種の具体的資料を効果的に活用し，地域社会の社会的事象の特色や相互の関連などについて考える力，調べたことや考えたことを表現する力を育てるようにする。」としている。ここでいう「地域」とは，自宅や通っている近くの学校などを含む，子どもたちの生活圏を指している。しかし，私立学校では徒歩通学の子どもは少数で，電車やバスといった交通機関を利用して遠方から通う子どもが多く，通学時間が１時間をこえるケースもめずらしくない。このように自宅や通学圏が広く分散しているため，学校周辺の地域に対する認識や愛着が希薄となっている。ここでは，私立学校４年生における地域学習の一提案をしたい。

1　調布市の地形的特徴

勤務校は東京都調布市に位置し，川や森，田畑などの緑豊かな自然と閑静な住宅街に囲まれている。学校から徒歩20分ほどのところに都内でも著名な寺院の深大寺があり，休日には多くの観光客でにぎわっている。学校に勤務しはじめたころ，先輩教員から「このあたりは近くに店もないから，地域学習は苦労すると思うよ」と助言を受けた。なるほど，近隣で子どもの生活にかかわりがありそうなものは，スーパーマーケットが２軒と，こぢんまりとした個人商店が数軒ある程度だった。

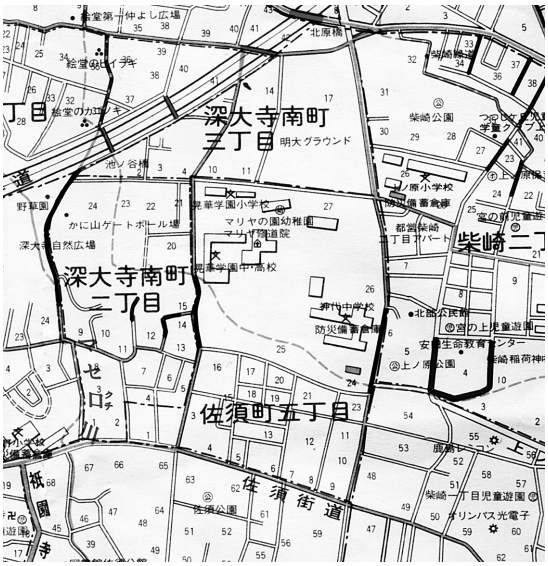
本学園は敷地内に幼稚園，小学校，中学高等学校のほか，木や草が多く生えた雑木林があり，ここが南面の傾斜地となっている。調布市は北に隣接する三鷹市側の土地が高く，南に多摩川が流れているため，こうした斜面や急坂が市内各地に見られる。これらの斜面や坂は，多摩川が武蔵野台地の縁を長い年月をかけて水の力で侵食して削った国分寺崖線の一部であり，地元では「ハケ」などと呼ばれている。

2　深大寺用水と富沢松之助

深大寺は，都内で台東区の浅草寺に次ぐ古刹として名高く，ここにちなむ「深大寺そば」はそば通の間では有名である。子どもたちの経験として，通学に利用するバスの車内で，深大寺の行事「だるま市」の広告や深大寺に向かう観光客を多く見かけている。また，１年生時の遠足先として深大寺に隣接する神代植物公園へ出かけた経験などもあり，ある程度認知されているといえる。

深大寺の周辺には先述のハケが通過しており，ハケの下からの湧水が水路となり多摩川の支流である野川まで流れ出ている。現在ではその水量は多くないが「釜」と呼ばれる湧水地が点在しており，古くから地域の人々の生活用水や農業用水と

して利用されていた。1855年に発生した安政の大地震の影響により「釜」から水が湧出しなくなり，困窮した村人から依頼を受けた深大寺村の名主の富沢松之助が，玉川上水の分水である砂川用水から水を引くように当時の品川県にはたらきかけ，工事を行ったのである。松之助は家財や土地を売り払い，用水工事の費用にあて，「いのちが終わるか，しんしょう（財産）が終わるか」という口癖を言っていたという話が伝えられている。総延長13kmにもおよぶ土手やトンネルなどの工事を11日間で行った。私財を投じて工事にあたった松之助はもちろん，村の人々は抱き合って喜んだという。



学校周辺の地図

3 単元の指導計画

単元の目標

① 副読本『わたしたちの調布』を読んだり，学校周辺を歩いたりすることで，地域の発展に尽くした富沢松之助や，地域の人々の生活の変化についてすすんで調べようとしている。
② 安政の大地震によって水脈を絶たれ困窮した深大寺村の，復興のために力を尽くした松之助の努力や苦労について考える。
③ 地震によって困窮した村の人々の思いや，松之助の思いをまとめることができる。
④ 松之助の努力によって深大寺用水が開削されたこと，深大寺用水の跡が学校のまわりに残っていることを理解している。

指導計画（12時間扱い，丸数字は時数）

学習のねらい	学習活動と内容	◎留意点　◇評価	□資料
○調布市の土地の高さ，四方位から学校の位置を考える。　①	わたしたちの学校は，調布市の中のどんな所にあるのだろう。 等高線の読み方を知り，地図から調布市の土地の高さの特徴をつかむ。	◇等高線を正しく読むことができる。 ◇調布市の土地の高低差に興味をもとうとしている。	□「調布市の地図」
○深大寺の周辺でそば作りがさかんな理由を考える。　②～⑤	なぜ深大寺周辺には，そばの店が多いのだろう。 深大寺の行事や深大寺そばの店などを見せ，歴史と伝統に気づく。なぜ，深大寺にそば屋が多くあるのか考える。 地図等を利用して学校や深大寺周辺の土地の高低差，水の流れを調べる。 深大寺たんけんをして，ひみつを探そう。 （コース）学校→原山橋→青渭神社→深大寺山門→水源の池→青渭神社→原山橋→学校 探検をふり返って，どのような秘密があったのかを話し合う。	◎深大寺周辺の湧水の場所を確認し，資料を活用しながら湧水が出るしくみを理解し，そばと水の関係を考える。 ◎そば作りに必要なものについて調べる。 ◇探検のなかから，そば作りがさかんな理由を探そうとしている。 ◎水源の池など，湧水の場所を見学する。	□「調布市の地図」 □そば屋の写真 □「深大寺&周辺地域観光マップ」 □副読本『わたしたちの調布』

学習のねらい	学習活動と内容	◎留意点　◇評価	□資料
○深大寺用水に対する村の人々の願いや，富沢松之助の思いを考える。　⑥〜⑨	水不足になった村の人々や，富沢松之助の気持ちを考えよう。 資料を通して，深大寺村の水不足について理解する。 水不足になった村人の気持ちを考える。 用水をつくった富沢松之助について知り，用水工事にたずさわる人々の苦労を考える。 深大寺用水はどこを通っていたのだろう。 現在に残る用水の跡を実際に歩いて，深大寺用水が流れていたところを探す。 （コース）学校→原山橋→都立農業高校神代農場角→池ノ谷橋→学校 探検でわかったこと，気がついたことを発表する。	◎村の人々の会話から，米作りや日々の生活に水が欠かせないものであったことを考えられるようにする。 ◎松之助の言葉から，深大寺用水にかける心情を読み取るようにする。 ◇「調布の水路・橋」の地図を見て，深大寺用水が通っていた場所を探そうとしている。	□副読本『わたしたちの調布』 □「対話深大寺用水」 □「調布史談会誌 第９号」 □「調布史談会誌　第 21 〜 30 号」 □「調布の古道・坂道・水路・橋」
これまでの深大寺用水の学習について新聞にまとめる。　⑩〜⑫	「深大寺用水新聞」を作ろう。 探検や調べたことをもとに，「深大寺用水新聞」を書く。内容は次の通り。 ・富沢松之助と村の人々　・用水の跡地 ・深大寺用水と跡地	◇調べたこと，探検してわかったことを，新聞にまとめることができる。	□副読本『わたしたちの調布』 □探検時の写真

4　子どものなかの地域性

子どもたちの意識には，深大寺や「深大寺そば」に対する関心が高かった。訪れたことはなくとも，深大寺がそばで有名であることは見聞きしたことがある様子であった。「なぜ深大寺周辺には，そばの店が多いのだろう。」という学習問題が生まれ，子どもたちはその秘密を探っていった。調べ学習のなかで，そば作りにはそば粉のほかに，水が必要であることもわかってきた。実際に深大寺に探検に行き，そば屋が多く並んでいる秘密を探ってみると，その地形的な特徴に驚かされた様子であった。水源池や寺の周辺を流れる水がそば作りに関係しているのでは，といった予想も出てきた。

また，事前に等高線の学習を行い，学校所在地の標高がおよそ50m，深大寺ではおよそ40mと，それらの差が10mにもおよぶことを理解させた。その等高線の間隔が狭いことから急な坂や斜面となっていることも探検を通してわかってきた。そして資料から，ハケから湧き出る水がそば作りに関係しているのでは，といった意見も出た。一方では，「そば作りをするには少ない。湧き水はちょろちょろとしか出ていなかった。」といった疑問

高低差約10mのハケと子どもの身長の比較

富沢家住宅と舗装された道の間の隙間

畑と舗装された道の間の隙間

が出された。昔と今の湧水量のちがいに関心をもつ子どもが出てきたところで，富沢松之助と深大寺用水の資料を提示した。

富沢松之助の深大寺用水開削の話を資料から学んだ子どもたちは，気になる点をあげてきた。その例として，「深大寺用水はどこを流れていたの？」「松之助の子孫っているの？」であった。

松之助と用水の資料を参照しながら，深大寺用水の流れていた場所を探検することにした。用水は1963年前後に廃止され，現在その姿をほとんど見ることはできない。ところが，そのなごりとも呼べるものがいくつか発見できた。具体的には，コンクリートで舗装された道と家屋や畑の間に見られた不自然な空間である。通常，電信柱は舗装道路と家屋や畑の境に建てられているが，これらの間に細い道のような隙間があったのである。子どもたちは「このあたりを用水が通っていたということは，ここ（隙間）に用水が流れていたところなんじゃないかな。」「土で埋めちゃったということ？」といった感想を述べていた。史実として正しいか判断はできないものの，用水の流路とその不自然な空間の場所が一致していたため，子どもたちなりに用水跡であろうと予想したのである。

また，その不自然な空間の近くには，富沢松之助の子孫の方が住んでいることがわかった。一人の子どもが，「先生，ここにも『富沢さん』がいるよ！」と，すぐそばの家の表札を指さした。探検をしていたルートだけでも「富沢」姓の表札のある家が多く見つけられた。名主である富沢松之助は用水開削によって家財や土地を売り払ってしまったが，用水によって「揚げ場」と呼ばれる水車小屋を建て生糸の生産を行っていたことや，用水を屋敷の中に引き入れていたことが，記録資料に残されている。松之助とその家族が，用水開削後も地域の有力者であったということがうかがえる。子どもたちは渡された資料を見ていると，あることに気がついた。「先生，深大寺用水が学校（敷地）の中を通っているよ。」「ほんとうだ，すごい。」「学校の庭（雑木林のこと）のあたりを流れているよ。」といったつぶやきが聞こえてきた。小金井市や小平市から通学している子どもは，自宅の近くを流れる玉川上水がかつて学校の敷地を流れていたことに気づいた。三鷹市からバスで通学している子どもは，「私が朝乗ってくるバスも行きは下り坂で，帰りは上り坂だよ。」というつ

ハケの湧水をさわる子ども

ぶやきを発していた。これらは，子どもたちなりの生活経験にもとづいた地域認識の深まりとしてとらえることができるだろう。

5 その後の単元へつなげて

１学期に「深大寺用水と富沢松之助」の学習を終えると，２学期には「晃華学園の歩み」，３学期には「多摩だるまと深大寺」という単元の学習を行った。「晃華学園の歩み」では，学校の成り立ちや所在地である調布市佐須町の昔の様子などを学んだ。そのなかで，深大寺用水が地元の製糸工場という意外な用途に使われていたことがわかった。その後，子どもたちは学校敷地内の国分寺崖線や深大寺用水の流路跡を探検したが，現在はその遺構を見つけることができなかった。しかし，本校は私立学校ゆえに長年勤務している教職員も多く，その教職員たちに学校の歴史についてインタビューをするなかで，「昔，崖の下には川が流れていたよ」「ザリガニなんかがいたな」といった証言を得ることができた。そこで，学校の古い資料や写真を探してみると，学校の設立当初に崖下で撮影された写真を発見できた。その写真には，現在では見ることができない小川と修道会のシスターが捉えられていた。こうした資料から，用水は学校の中をたしかに流れていた，と子どもたちは確信できた。

２学期の学習をふまえ，製糸工場で作られる生糸と，深大寺で開催される「だるま市」で販売されているだるまについての学習を行った。販売されるだるまには群馬県産の「高崎だるま」のほかに，東京都の多摩地域で製作される「多摩だるま」もある。明治時代の開国にともない，国産生糸が高価で外国と取引されたことを受け，調布市内の田畑は桑畑へと姿を変え，多くの養蚕農家が生まれた。養蚕は生きた昆虫を扱うという難しさがあったため，蚕を病気から守ったり，より多くの収繭を願ったりして，繭の形に似せただるまへの信仰が広まったとされている。多摩地域で独自の発展した多摩だるまが，深大寺の「だるま市」で販売されていることを知った子どもたちは，だるま作りに関心をもった。そこで，多摩だるまの工場を見学して，その歴史，職人の技術，これからの多摩だるま作りについて，多くのことを学んだ。

学園内を流れていた深大寺用水と思しき小川（1950年代ごろ）

子どもたちは，地域を通して深大寺用水から学校の歴史，伝統工芸を学び，さらに，その対象地域も調布市から多摩地域へと広げていった。

6 おわりに

「深大寺用水と富沢松之助」の単元ではまち探検を二回実施したが，いずれの回も子どもの「ここが知りたい，調べたい」という課題意識を明確にして探検することができた。

かつて深大寺用水は本校の校庭を通り，敷地内の国分寺崖線を下って野川まで流れていた。学校の歴史をひもとくと，明治時代に紡績工場が敷地内にあったという記録が残されている。用水は地域の人々の生活のみならず，日本の近代化を支えた製糸業にも関係していた。また，深大寺で行われる「だるま市」の行事も，生糸の原料となる蚕の病気を防ぐことを祈願するために，蚕の繭と似せた形状のだるまを農民が農閑期に作ったことが

起源とされている。

「地域の発展に尽くした先人」である富沢松之助が開削した深大寺用水は，現在ではその姿を見ることはできない。しかし，用水が学校の敷地内を流れていた事実に触れることで，学校周辺の地域をより身近に感じ，興味・関心を高められたと考える。

本単元を終えたある子どもがこうつぶやいた。「あー，おれ，すっかり松之助ファンになっちゃったよ。」その子どもにとって松之助の存在が身近に感じられたのは，実際に見て，歩いて，得た感想なのだろう。国分寺崖線は調布市だけではなく，多摩川沿いの国分寺市，国立(くにたち)市，小金井(こがねい)市，府中(ふちゅう)市，三鷹市，狛江(こまえ)市，世田谷(せたがや)区などにも見られ，それは本校の多くの子どもが住む地域と重なる。また，深大寺用水とその本流である玉川上水も，調布市だけではなく小平(こだいら)市，国分寺市，小金井市，武蔵野(むさしの)市，三鷹市，杉並(すぎなみ)区などを流れ，これらもまた同様である。以上のことから，取り上げた教材（ここでは国分寺崖線と玉川上水）の「つながり・かかわり」を追究することで，より広範な地域を扱うことができる。子どもたち一人ひとりの暮らす地域での生活経験や知識が，そこから遠く離れた学校の周辺地域でも共通して学習に生かされたのである。

以上の事柄をまとめて考えてみると，今後の課題としては，３・４年生においては教師自身が学習対象の「地域」をしっかりと捉え直すこと，５・６年生においては地域性を生かした教材開発や授業展開の研究であると，自戒を込めて思う。これらのことを関連づけることで，広域の通学圏をもつ私立学校においても，地域性を強調した学習展開が可能となるのではないだろうか。

参考文献

調布市市史編集委員会編『調布市史　下巻』（調布市 1997年）
調布市市史編集委員会編『近世調布の村むら』（調布市 1984年）
『調布の古道・坂道・水路・橋』（調布市教育委員会 2001年）
『調布史談会誌－合冊綴－第21号～第30号』（調布史談会 2004年）
中西駿郎『対話深大寺用水』（調布市郷土博物館　1976年）
『調布史談会誌－合冊綴－自第１号至第10号』（調布史談誌　1978年）
調布市立図書館編集『子どものための調布市の歴史　第2版』（調布市立図書　2001年）
たましん歴史･美術館歴史資料室／編『多摩のあゆみ69号』（たましん地域文化財団　1992年）

実践紹介　5年

鎌倉材木座海岸のしらす漁

ー地域の素材を活用した単元「水産業のさかんな地域」の学習ー

神奈川県鎌倉市立第二小学校　髙橋岐明

1　地域の素材を生かす

単元「水産業のさかんな地域」を，地域素材のしらす漁を題材に「鎌倉材木座海岸のしらす漁」として実践した。本校は，学区に鶴岡八幡宮をはじめ，幕府の鎮守荏柄天神，源頼朝の墓，腹切やぐらのある東勝寺跡，美しい竹林のある報国寺など旧鎌倉きっての地域である。また，材木座・由比ヶ浜の海岸にも近く，自転車を利用して10分ほどで行くことができる。周辺には，ベランダにサーフボードを常置してある家々もよく見られる。子どもたちは，鎌倉漁業組合のもんざ丸・喜楽丸・三郎丸など，しらすの専門店（第一小学校・稲村ケ崎小学校区など）で購入したり食べたりした経験は少ない。しかし，しらすは日常的に食卓にも上り，「湘南しらす」としてもブランド化され，地元の代表的な水産物である。

『学習指導要領解説　社会編』59ページには，「『食料生産に従事している人々の工夫や努力』を調べるとは，稲作，野菜，果物，畜産物などを生産する農業や水産業の盛んな地域の具体的事例を取り上げ，農業や水産業の盛んな地域の人々が，消費者の需要にこたえ，新鮮で良質な物を生産し，出荷するために様々な工夫や努力をしていることや，地形や気候などの自然環境や社会的な条件を生かして生産を高める工夫や努力していることを具体的に調べることである。」とある。また，同100ページには「『地域の実態を生かし，児童が興味・関心をもって学習に取り組めるようにする』ことについては，地域にある素材を教材化すること，地域に学習活動の場を設けること，地域の人材を積極的に活用することなどに配慮した指導計画を作成」とある。

今回，取材させていただいた「もんざ丸前田水産」の前田洋平さんは，鎌倉漁業組合に所属し，漁・加工・販売までを行っており，子どもたちにとっては取り組みやすい地域教材である。また，子どもたちにも身近なしらすがどのように獲られているのか，その漁を通し，「洋平さんのしらす漁」「漁に必要なもの」「材木座の海の自然・環境」「洋平さんの願いやこだわり」へと，考えを広げ深めやすい学習と考えた。

単元の指導計画は，後のページの表に示した通りである。昨年度，地元のしらす漁や日本各地の水産業について学習したあと，ゲストティーチャーとして洋平さんと長久保さん（漁師を目ざして洋平さんのもとで修業中）を教室に招いて，お話をしていただいた。その折，洋平さんの話に教室が静まる場面があった。「一人前の漁師になるには，どれぐらいかかるんですか。」との質問だった。洋平さんの答えは，「時間じゃないんだな。一生懸命やるやつは経験がなくてもちゃんと結果を出すと思う。反対にだらだらとやっているやつは，いつまで経っても変わらないんだよ」であった。

2　授業づくりについて

子どもたちはこれまで，単元「わたしたちのくらしと国土」，単元「食料生産を支える人々」の学習に取り組んだ。その中で，教科書や資料集に多数掲載されている資料が学習問題の解決に沿うように選択・配置されており，また，その読み取りがしやすいために，子どもの知的好奇心の喚起や学習意欲を削いでいる面が見られた。また，限

られた授業時間の中での重要語句や資料の解説に終始しかねない面も生じさせている。社会科が本来もっているダイナミズムは，現実に起きている社会的事象を扱うことである。子どもたちが主体的に参加し活動できる授業をつくるためには，魅力的で切実性のある素材を実生活に関連づけて教材化することが必要となる。

そこで授業づくりの工夫を「焦点化（ねらいやそのねらいの中で活動）」「視覚化（視覚情報とその選別や提示方法の工夫）」「共有化（自身の考えがつながる・広がり・深まる学習活動）」の三つの手だてにより，子どもたちが意欲的に活動できる授業を目ざした。

・**焦点化**…絞りこんだねらいとそのねらいの中での活動であり，そのねらいに近づけるための意図的なはたらきかけや子どものつぶやきを拾う活動である。また，子どもの考えをゆさぶる活動にもなり得る。具体的には，「この場面からどんなことが考えられる？」「何を考えていたんだっけ？」「ほんとうにそれでいいの？　こんな考えをした人もいるけど，あなたはどう？」などの投げかけである。この単元を貫く焦点化されたねらいは，「洋平さんの願い」である。

・**視覚化**…上記の焦点化されたねらいに迫るための視覚的情報である。動画と写真のいずれも，「洋平さんの願い」に迫るために選別した。ここでは，子どもたちの予想を確認するために10分程度の動画を，子どもたちの考えを構造化するために視点ごとにまとめた写真を使用した。

・**共有化**…個々の考えがつながり，広がり，深まる活動（＝発言の価値の高まり・聞く環境づくり）である。具体的には，「いいこと言ってくれたよね，聞こえた？」「○○さんはどうしてそう考えたのかな，みんなどう思う？」「○○さんとちがうことを付け加えてくれたけど，わかった？」「すごいね，そこに気づいたんだ。」などの投げかけである。これらの投げかけでは，一つの事実を子どもたちが認識したうえで，どのように認識したのかを問うことが大切である。つまり，一人ひとりの捉え方のちがいを共有することが，「へぇ，そう考えたんだ，自分はちょっとちがって…」などの発言に発展して，広がり・深まりにつながっていく。

既習の「米づくりのさかんな地域」単元では，さまざまな課題を見つけることができた。「米づくりのさかんな地域」単元では，教科書『小学社会　５上』58ページから61ページの掲載資料から，一人ひとりの気づいたことや，疑問に思ったことを付箋に書き出し，それを模造紙大に拡大コピーした上記資料に貼りつける作業など，教科書を使った学習に取り組んだ。しかし，子どもたちの関心や意欲をわきたたせたのは，芸能人が実らせた品種と山形県の農家がつくった品種を比較したテレビ番組（番組「ザ！鉄腕！ DASH!!」で，出演のTOKIOが実らせた品種と米づくりの達人遠藤氏がつくった品種を比較する）の映像であった。「自分たちが作ったお米と比較し，なぜおいしいのか」「どうすれば，そんなお米がつくれるのか」といった焦点化がなされ，焦点化につながる視覚的情報で構成されていた。子どもたちの関心を釘づけにした焦点化と視覚化は，授業づくりにつながるものとなった。また，始業前の短時間学習で扱った「さかなクン誕生！おしえて“さかなクン”」「食卓を代表するアジ」「ザ・しらす」「夏が旬のお魚，○○にはご注意」「洋平さん・長久保さん・サナさん」などの聞き取り学習も本時の学習につながっている。

昨年度の学校への出前授業や材木座海岸での校外学習の子どもたちの様子を見て，洋平さんが「先生，“しらす漁”のこととか，“港”のこととかあまり質問に出ないね。エイとかうつぼのことばかりだよね。」と言われた。「ありのままのおれたちの漁を知ってほしいんだよ」と，協力を惜しまない洋平さんの本音だろう。このときの洋平さんの顔を思い浮かべながら，２年めの今回は，「洋平さんと子どもたちとの出会い」を成功させなければならないと心に決めた。洋平さんとの出会いまでに，どのような子どもたちに育てておかねば

ならないのかを，なやむばかりであった。

教師から洋平さんの思いを伝えるのではなく，自然に子どもたちの意識を洋平さんに近づけていくにはどうしたらよいのか。そのためには，しらす漁に興味を持たせることが前提となり，洋平さんと出会うまでに，教師のねらいを達成させるための『焦点化』が必要であった。焦点化とは，練り上げられた授業方針である。明確な『焦点化』を教師が持っていれば，そのねらいに通じる子どもの発言やつぶやきを拾い上げ，つなげ・広げ・深めていくことができる。子どもの考えをつなげ・広げ・深めるための有効な手だてとして，視覚的資料も必要であった。なかでも取材ビデオの存在は大きかった。こんな資料が欲しいと思い立ったときに取材撮影のデータからビデオの切り出しや結合といった編集をして，船のエンジン音や巻き上げ機にあたるブイのプキッというような音の入った迫力ある動画を，子どもたちの集中力が続く5～10分程度に収めることができた。また，静止画をつくって，「こんな場面あったよな」「この場面のことかな」などと投げかけることで，子どもたちの考えを構造化する手だてとなった。

しかし，授業を子どもたちとすすめていくうえで，「焦点化」は非常に難しかった。前述の動画の中で，漁を終えて浜に帰る場面に映り込むサーファーの存在が1秒間ほどあった。その場面で動画を停止させ，「この場面から考えられることってなに？」と投げかければ，子どもたちはサーフィンを楽しむ人の材木座の海，しらす漁を営む洋平さんたちの漁師の海という視点が芽生えることとなったであろう。また，子どものノートには，漁師になるにはどうしたらいいの？との質問があったが，これをもとに「漁師になるには？」と板書することで，修行期間，船の置き場，浜小屋の数と決まりごと，材木座の漁師の人数は多いのか少ないのか，漁業組合ってなに，などと疑問が広がり，洋平さんが長久保さんを修行させている気持ちに考えが及びやすくなる。この研究は，洋平さんの「漁港が欲しい」という願いや「洋平さんのこだわり」を，子どもがより身近に考えられるように取り組んだものである。

3 指導の実際

（1）単元の目標及び指導計画

目標：しらす漁の画像・映像を見たり，しらす漁に携わる洋平さんと出会ったりして，しらす漁に関わる事柄をとらえ，すすんで考え，発表することができる。

（2）本時の目標及び授業内容（第2次）

単元名　食料生産を支える人々		
次	鎌倉材木座海岸のしらす漁	水産業のさかんな地域 （教科書での「本時の問い」）
1	水産業のさかんな地域を教科書で調べよう ～ワークシート～	わたしたち食べている水産物は，どこで多くとれるのだろう。
2	材木座海岸のしらす漁を学ぼう ～しらす漁の方法～	漁師の人たちは，どのような方法で，さんまをとっているのだろう。
3	材木座海岸のしらす漁を学ぼう ～なぜ船をのりかえるの？～	さんま漁のあと，漁港でどのような仕事が行われているのだろう。
4	聞きたいこと・知りたいことってなに？ ～校外学習前日～	さんまはどのようにして，わたしたちのもとにとどくのだろう。
5	洋平さんに見せてもらおう，教えてもらおう ～校外学習当日～	漁師の人たちは，漁業を続けていくなかで，どのようななやみや願いをもっているのだろう。
6	洋平さんの願いについて考えよう	魚を育てる養殖業とは，どのような漁業なのだろう。
7	洋平さんのこだわりってなんだろう	水産資源を守り育てるために，どのような取り組みが行われているのだろう。

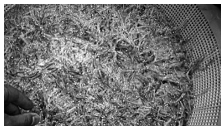
1

2

3

4

5


6

7

8

9

10

11

しらす漁の網を海へ下ろしてから引き上げるまでの様子

もんざ丸の洋平さんたちは，どのようにしらすを獲るのか，写真をならべかえよう～「まなボード」に写真をならべかえ，どうしてその順番にしたのかメモしよう～

（3）授業づくりの工夫

・「しらすって好き？食べたことある？」「生と釜揚げの，どっちが好き？」と投げかけ，生しらすと釜揚げしらすの写真，材木座海岸周辺の写真（もんざ丸の漁船・店舗）を提示し，しらす漁の学習を身近に感じさせる。　＜視覚化＞

・網を海へ下ろしてから引き上げるまでの様子の写真11枚について「ならべかえよう」と，黒板いっぱいに掲示する。それに対した「オレンジ色のウキを投げてるのが最初だよ」などの子どものつぶやきを取りあげ，「いいところに目を向けたね」と，子どものつぶやきをつなげていく。　＜視覚化＞＜共有化＞

・写真を掲示した後に，「網を入れて，そして網を上げてしらすを獲るんだよね」「最後の写真はどれだろう？」「網を船に上げるときって，人の手で上げるのかな」などと漁の様子をイメージしやすくする。また，班で話し合っている子どものつぶやき（「最後はバケツだよ」「魚は後？先？どっち」「ローラーがあるから」「網の出方が」「網から魚をとっているみたいだよ」など）を拾いながら板書する。　＜焦点化＞＜共有化＞

・学習のふり返り　＜個人作業＞

4　成果と課題

・「まなボード」は写真をはさんだり，白板マーカーでコメントを記入できたりする教材である。学習問題を共有したり，班の意見を表現・発表させたりする手段として有効であった。それは授業後に，子どもたちが黒板に貼られた他の班の「まなボード」を比較し合っていたことからもうかがえた。

・自分たちの「まなボード」を発表したい班は６つあったが，時間の関係で４つの班の発表で終了した。また発表時に，着目させた方がよい視点があった。

・網をはたいている写真（９）は，最初に網を水に浸して海水になじませるととらえた班もあれば，網を上げる最終段階ととらえる班もあった。また，写真（11）は，しらすの白い細かい網を引き上げる直前の準備としてとらえる班もあれば，しらすを獲る場面と，とらえた班もあった。発表時に視点をはっきりさせておけば，「自分たちの班は，前の班とちがって…」と，発表の深まりや発表への意欲を高められたかもしれない。そして，視点をはっきりさせたうえでビデオを視聴すれば，学習のふり返りに大きく反映されていたであろう。

各班が作成した『まなボード』

社会に対する認識と判断を深める社会科学習

－新時代を創る若い武士たち・明治維新－

徳島県鳴門市鳴門西小学校　前田晴雄（まえだはるお）

1　今後の社会科のあり方について

①「論点整理」から考える社会科の役割

2015年８月に出された中教審の教育課程企画特別部会による「論点整理」（以下，「論点整理」）では，次期学習指導要領の方向性と各教科の改善点が示された。具体的にはグローバル化や情報化等，社会や職業のあり方そのものが大きく変化することに伴い，教育のあり方も進化させることが求められている。特に，学ぶことと社会のつながりを意識し，「何を教えるか」という知識の質・量の改善に加え，「どのように学ぶか」という学びの質や深まり，さらには「どのような力が身に付いたか」という学びの成果を重視することが示された。そして，このような学びの質の転換については，アクティブラーニングと総称され現在盛んに論じられている。

このように「論点整理」で示された「学びと社会とのつながり」や「学びの質的転換」については，まさしく社会科がめざしてきたものそのものである。そういう意味では，今後の教育全体において，社会科の占める役割の重要性はよりいっそう大きくなることが予想される。

②社会科におけるアクティブラーニング

それでは，社会科におけるアクティブラーニングとはどのようなものだろうか。「論点整理」では「これまでに獲得した知識や技能だけでは必ずしも十分ではないという問題意識を生じさせ，必要となる知識や技能を獲得し，さらに試行錯誤をしながら問題の解決に向けた学習活動を行い，そのうえで自らの学習活動を振り返って次の学びにつなげるという深い学習プロセスが重要」であり，さらに「判断の根拠や理由を示しながら自分の考えを述べること」とある。これらは，繰り返しになるが，これまで社会科がめざしてきたものであり，社会科としての方向性の正しさを示している。

しかし，これまでの社会科では，科学的な認識を重視するあまり現在の社会の情勢や子どもの問題意識から乖離してしまったり，子どもの問題意識を重視するあまりその根拠となる科学的な認識が不十分になったりした実践もあった。そこで本稿では，「論点整理」で示された内容を実現するための社会科学習を「社会に対する認識と判断を深める社会科学習」と名付け，提案する。

③社会に対する認識と判断を深める社会科学習

「社会に対する認識と判断を深める社会科学習」とは何か説明する。まず，子ども自らが問題意識をもって，調べ学習（見学・調査やインタビュー等）に取り組み，その結果をまとめ，共有し認識を深めていく。その認識の中には，子どもの問題意識と離れているため獲得できなかったものや，視点が偏っているもの，また理由や根拠が不十分なものがある。そのように子どもにとって不十分な認識について「知識の構造図」を作成することにより明らかにしたうえで，子どもにゆさぶりをかける発問をすることにより，認識を深めるきっかけとする。さらにその発問を，子どもに判断させる問い方にすることにより，多面的に深まった認識を根拠として自分の考えを述べることができるようになる。このような学習が実現することにより，社会に対する科学的な認識を構築し，その科学的な認識を活用し判断できる子どもの育成につながると考えている。

2 本稿で提案する実践

①単元について

本実践では，明治維新（「新しい時代の幕あけ」単元）を取り上げる。明治維新は，鎌倉時代から続いた武士の政権の終焉であるとともに，近代国家の成立につながる重要な歴史の転換点である。政治権力が常に【破壊→創造→安定→衰退→破壊】というように繰り返してきたこと，そして再び政権が天皇に奉還される一方で，民衆の力や社会の成熟による近代国家の成立という側面について理解しなければならない。現行の学習指導要領『解説』では，西郷隆盛，大久保利通，木戸孝允らの働きによって明治天皇を中心とした新政府が樹立したこと，勝海舟と西郷隆盛の会談で実現した江戸城無血開城，新政府の政治方針として五箇条の御誓文が示されたことなどが挙げられている。さらに，この政権交代は従来のような単なる為政者の交代という側面ではなく，近代国家の成立という転換点になっている。それは，立場も身分も異なる若い下級武士たちが，結果的に連携し政権交代への原動力になったという点に表れている。この人物たちの相関関係に着目することこそが，本教材の最大の特徴である。この相関関係は複雑であり，当初，藩士や脱藩浪人，また幕臣等，全くちがう立場にあり，それぞれの意図は異なっていたにもかかわらず，最終的には一致した方向性に集約されるところにおもしろさがある。複雑に絡み合う人物相関を考えることから，明治維新の歴史的事象をつなぎ，それらの意味を追究し歴史認識を深められるようにしたい。

②知識の構造図

次ページに本単元の「知識の構造図」を掲載した。このような図を作成することにより，単元の中で学習内容を整理できるとともに，この図を指導計画づくりに活用することにより，子どもが主体的・協働的に学べるようにすることが目的である。勝海舟や西郷隆盛などの業績が関連し合っていることに気づき，具体的な知識からより抽象的な知識へと深化していくことを示している。その抽象的な知識をさらに比較したり，関連させたりするための課題を工夫し，人物相関図の作成場面や判断場面を設定することを通して，社会に対する認識を深めることができるのではないかと考えている。

③指導計画

子どもが主体的・協働的な学習をすすめられるように，問題解決的学習の形式で指導計画を組んだ。本単元では，単元を貫く学習問題として，「明治維新で最も重要な働きをしたのはどの関係性だろう。人物相関図を作成して考えよう。」と設定し，調べ学習をすすめた。そして，「みんなで確かめる」段階において「どの関係が重要か」について問い，さらに補足する発問として，「どの関係が重要か，意見が分かれたね。どの視点も大切なのに，なぜ意見が分かれたのだろう」と問い直す。この問い直しにより関係性を多面的にとらえ，明治維新に果たした役割（「倒幕」「平和な政権委譲」「欧米に学んだ近代国家」など）を考え，それぞれの役割が時代に応じて変化していることに気づかせたいと考えた。

知識の構造図（丸数字は，指導計画の丸数字（時間）に対応）

〔学習指導要領との関連〕

○第６学年の目標（1）

国家・社会の発展に大きな働きをした先人の業績や優れた文化遺産について興味・関心と理解を深めるようにするとともに，我が国の歴史や伝統を大切にし，国を愛する心情を育てるようにする。

○内容（1）

我が国の歴史上の主な事象について，人物の働きや代表的な文化遺産を中心に遺跡や文化財，資料などを活用して調べ，歴史を学ぶ意味を考えるようにするとともに，自分たちの生活の歴史的背景，我が国の歴史や先人の働きについて理解と関心を深めるようにする。

キ　黒船の来航，明治維新，文明開化などについて調べ，廃藩置県や四民平等などの諸改革を行い，欧米の文化を取り入れつつ近代化を進めたことがわかること。

【中心概念】

明治維新を支えた人々の役割と関係，また日本の国家が欧米の文化を取り入れ，近代国家として成立する過程について理解している。　⑦⑧

尊皇攘夷運動と武力による倒幕

薩摩藩の西郷隆盛・大久保利通と長州藩の木戸孝允は，土佐藩の坂本龍馬の仲介により倒幕のため同盟を結んだ。　④～⑥

・薩摩藩
・長州藩
・坂本龍馬
・木戸孝允
・西郷隆盛
・尊皇攘夷
・倒幕

武士政権の終焉と天皇の政権奪還

武士から政権を奉還された明治天皇は，五箇条の御誓文を発布し天皇中心の国家の樹立をめざした。　④～⑥

・明治天皇
・五箇条の御誓文
・大政奉還
・徳川慶喜

国力低下を防ぐための政権委譲

勝海舟と西郷隆盛は，江戸の町を守り国力の低下を防ぐため，江戸城無血開城を決めた。　④～⑥

・勝海舟
・西郷隆盛
・江戸城
・戊辰戦争

富国強兵による近代国家の樹立

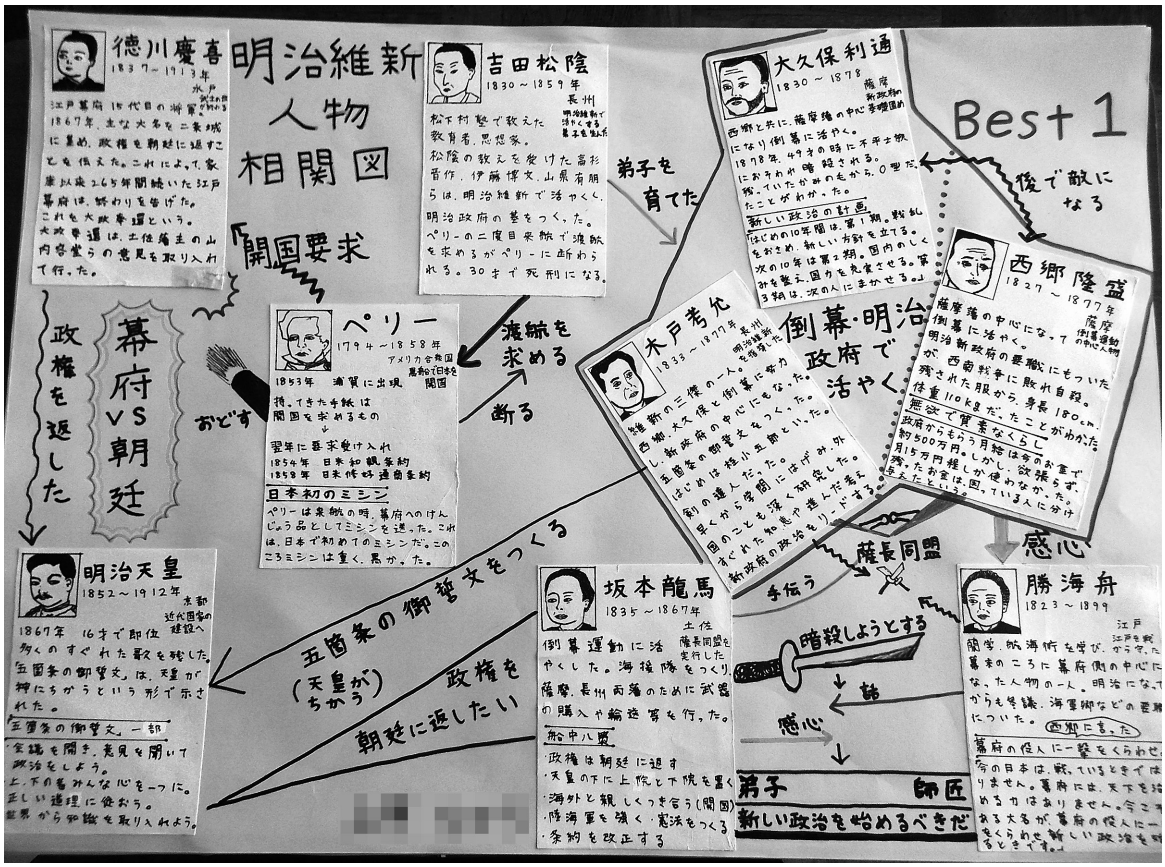
大久保利通らは欧米の文化を取り入れ廃藩置県や四民平等の諸改革を実施し，近代国家のしくみが整えられた。　④～⑥

・廃藩置県
・四民平等
・富国強兵
・欧米視察団
・殖産興業
・地租改正

指導計画（全８時間）

段階	活動と評価（◆）	予想される子どもの反応	指導・支援
学習問題をつかむ	①ペリー来航から明治維新，文明開化について調べよう。 ◆黒船絵図などから明治維新について関心をもち，学習問題を立てている。 【関心・意欲・態度】	・アメリカから黒船がやってきて江戸幕府はどうなったのかな。 ・江戸時代と明治時代では，学校の様子がずいぶんちがうね。 ・西郷隆盛や坂本龍馬のことはテレビで見たことがあるよ。	○ペリー来航や寺子屋の絵図や資料集，教科書を電子黒板に提示することにより，明治維新への流れについて経緯をつかむことができるようにする。

段階	活動と評価（◆）	予想される子どもの反応	指導・支援
予想を立てる	明治維新で最も重要な働きをしたのはどの関係性だろう。人物相関図を作成して考えよう。		
	②ペリー来航からどのように明治新政府が樹立されたのか予想を立てよう。 ◆自分の予想を立て表現している。　【関心・意欲・態度】	・アメリカと戦ったんじゃないかな。 ・徳川家に代わる武士が現れたんじゃないかな。 ・天皇に政権が戻ったのかもしれない。 ・西郷隆盛・木戸孝允・勝海舟らはどんな人だったのか調べたいな。	○ペリー来航から明治新政府樹立への動きについて自分なりの予想を立てさせる。 ○出身藩などを調べる場を設定することにより，興味を持つことができるようにする。
調べ方を決める	③調べ方を考えて計画を立てよう。 ◆自分の予想を確かめるための方法を考えている。 【関心・意欲・態度】	・それぞれの人物カードや人物相関図を作成するために，教科書や資料集，書籍等をもとに調べよう。 ・それぞれの人物は複雑に関係しているみたいだな。	○予想に対する調べ方を既習事項から問うことにより話し合わせ，調べる計画を立てることができるようにする。
ひとり(グループ)で調べる	④西郷隆盛・大久保利通について調べよう。 ◆西郷・大久保について調べ，ノートにまとめている。 【技能・知識】	・二人は同郷の薩摩藩出身だね。 ・西郷は勝海舟と会談して，江戸城無血開城のきっかけをつくっているよ。 ・大久保は明治新政府の中心人物として新しい国づくりをめざしたね。	○キーワードを電子黒板で提示することにより，教科書や資料集，書籍等から西郷・大久保について調べ学習ができるようにする。
	⑤木戸孝允・坂本龍馬について調べよう。 ◆木戸･坂本について調べ，ノートにまとめている。 【技能・知識】	・木戸は長州藩，坂本は土佐藩出身だね。木戸は新政府の中心人物になるよ。 ・仲が悪かった長州藩と薩摩藩をつないだのは坂本だったんだ。 ・考え方が攘夷から倒幕に変わるね。	○キーワードを電子黒板で提示することにより，教科書や資料集，書籍等から木戸・坂本について調べ学習ができるようにする。
	⑥勝海舟・徳川慶喜について調べよう。 ◆勝・慶喜について調べ，ノートにまとめている。 【技能・知識】	・勝海舟は旗本から徳川幕府の中心人物になったんだね。 ・江戸を戦火から救ったんだ。 ・慶喜は，大政奉還後も政権に加わることができると考えていたんだ。	○キーワードを電子黒板で提示することにより，教科書や資料集，書籍等から勝・慶喜について調べ学習ができるようにする。
みんなで確かめる(本時)	どの関係が重要か，意見が分かれたね。どの視点も大切なのに，なぜ意見が分かれたのだろう。		
	⑦どのように明治維新がなされ，どの関係が最も重要だったかについて確かめよう。 ◆それぞれの人物と相関関係について，これまでの調べ学習をもとに自分の考えを発言している。　【技能・知識】	・平和な政権委譲という観点からは勝と西郷，そして徳川慶喜の関係だよ。 ・倒幕は，西郷・木戸とそれをつなぐ坂本なしには実現不可能だったと断言できる。 ・欧米の文化を取り入れた近代国家の成立から考えると，大久保と木戸が最も大きな役割を果たしているよ。 ・どの関係も近代国家樹立のためには重要な観点になるんだ。	○人物の業績と関係の重要性について話し合わせることにより，観点がちがうことに気づけるようにする。 ○合意形成させるのでなく，観点のちがいが評価のちがいとなることに気づかせる。この観点が近代国家成立の要素となることに気づけるようにする。
広げ深める	明治維新直前に亡くなった坂本龍馬に，どんな国になったか教える手紙を書こう。		
	⑧坂本龍馬に明治の国についての手紙を書こう。 ◆学習内容を生かした手紙を書いている。【思考･判断･表現】	・龍馬がいうように国会が開かれるようになったよ。 ・外国とは戦争をするようになってしまったんだ。 ・平等な社会はまだ先になったよ。	○龍馬に手紙を書かせることにより，学んだ複数の視点をふり返ることができるようにする。



作成した人物相関図

3 学習の実際と考察

①問題解決的な調べ学習

学級には歴史学習が好きな子どもたちが多く，「予想を立てる」段階においてかなりの知識が入っており，「薩長同盟」などの言葉が挙げられていた。しかし，教師の予想どおり，これまで学習してきた時代と同様に「武力による政権交代」という意識に傾き，「誰が幕府を倒したのか」という視点で調べ学習をスタートしていった子どもが多かった。

②人物相関図の作成

まず，「人物カード」を作成させる。次にそれらを模造紙上に自由に配置させ，人物相関図を作成した。例示した人物のみならず，関連すると思われる人物も対象に調べさせると，吉田松陰や明治天皇，徳川慶喜など多くの人物が追加されていた。この時点で，それぞれの関係が複雑に絡み合っていることや，年代ごとに変化してくる様子にも気づいた子どももいた。

③電子黒板の活用

人物相関図を作成して「最も重要な関係はどの関係か」を発表させる際，電子黒板を活用した。

電子黒板を利用した子どもによる説明

電子黒板の活用には，焦点化，実物投影機能，コンテンツの活用，子どもの表現ツールなどの利点がある。今回は電子黒板についての研究ではないので詳細は省くが，この四つの利点のうち焦点化と子どもの表現ツールとして電子黒板を利用した（また，日常的に自作コンテンツから人物名や業績について学習させている）。電子黒板に枠だけのシートを用意し，その枠に人物名や関係性を書き込みのうえ説明させた。このことにより人物相関図を示しながら説明できるため，複雑で視覚的にわかりづらい点が解消され，子どもの意識の焦点化を図るうえでも有効であった。また，電子黒板を活用したプレゼンテーションを繰り返し行わせることにより，要点をわかりやすく図式化したり，説明したりする能力が身に付き始めている。

④認識と判断を深める問い直しから話し合い活動

それぞれが自分の意見について述べたあと，「どの関係が重要か，意見が分かれたね。どの視点も大切なのに，なぜ意見が分かれたのだろう。」と問い直した。この問い直しとともに「それぞれの業績にキャッチフレーズをつけることで考えよう。」と補足の発問を行った。この二つの問いから，まず自分が最も重要と考えた関係性について，キャッチフレーズをつけた。それらを発表し合ったうえで比較すると，「明治維新といっても，年代によって活躍した関係性が変化するんじゃないかな」とか「個人の関係も年代によって変わっているよ」といった意見が出された。最終的に「明治維新は『尊皇攘夷』から『武力倒幕』，そのための『薩長同盟』，そして国力低下を防ぐための『江戸城無血開城』，さらには『欧米から学ぶ近代国家』と，年代が移り変わるなかで，大切な役割や活躍した人物が変化してきたんだ」という結論へと意見が集約されていった。

子どもたちの学習のふり返りをみても，「はじめは薩長同盟がいちばん大切だと思っていたけど，視点を変えると大久保や木戸による明治の新しい国づくりも重要だということがわかった」など，自分が意識していなかったり，弱かったりした視点について，再度考えることができていた。また，歴史の連続性についても考えが及んだと思われ，既習の単元と合わせて「信長や秀吉の業績を引き継いで家康が政治を行っていたのと同じように，それぞれの関係がつながっていることがわかった。」というふり返りがあったことは成果として挙げられる。これが「社会に対する認識と判断を深める社会科学習」の一例である。

話し合い後のまとめの様子

4 おわりに

歴史学習に限らず社会科学習全般において，いかに社会的事象を多面的にとらえ科学的認識を深めるか，そして，そこで得た科学的認識を社会的な問題場面において，いかに活用して価値判断し意思決定する力を身に付けていくかが，今後いっそう重要となる。その点において，本稿で紹介した実践は一つの方向性を示すことができたのではないだろうか。

今後も，社会の変容と学校および社会科の役割の関連性を見極めながら，新しい社会を担う次世代の子どもの育成という大きな使命を胸に研究をすすめていきたい。

まもなく締め切り!!

第14回

地球となかよし メッセージ 作品募集（2016年度）

「地球となかよし」という言葉から感じたり，考えたりしたことを，写真（またはイラスト）にメッセージをつけて表現してください。

応募者全員に参加賞がもらえるよ！

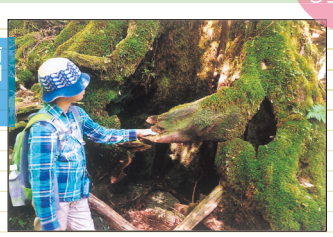
応募資格	小学生・中学生（数名のグループ単位での応募も可）
応募期間	2016年7月1日 ～ 9月30日 詳細は「優秀作品展示室」とあわせてホームページをご覧下さい。
作品テーマ	①身のまわりの自然が壊されている状況を見て感じたことや，自然環境や生き物を守るための取り組み ②さまざまな人との出会いを通して，友好の輪を広げた体験，異文化交流，国際理解に関すること ③その他，「地球となかよし」という言葉から感じたり，考えたりしたこと

◎主催／教育出版　◎協賛／日本環境教育学会
◎後援／環境省，日本環境協会，全国小中学校環境教育研究会，毎日新聞社，毎日小学生新聞
＊協賛・後援団体は昨年実績で，継続申請中です。

応募の決まりなど詳しくはホームページを見てね
http://www.kyoiku-shuppan.co.jp/

教育出版　「地球となかよし」事務局　TEL. 03-3238-6862　FAX. 03-3238-6887
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町２－10

前回入選作品



年の差　何才？

ぼくは，この夏，鹿児島県にある屋久島に行きました。屋久島には，まるで今にも動きだしそうな不思議な形をした屋久杉がたくさんありました。材木に適さないくらいねじれたり曲がったりしているものや，伐採された後の切り株や倒木の上に種が落ちて育ったもの。理由はさまざまです。その中で，ぼくは，まるで握手を求めているようなコケむした大きな樹を見つけました。「やあ，よく来たね。」「こんにちは。おじゃましています。きれいな森ですね。あの，ぼく達の年の差は何才でしょうか？」「さあ，何千才かのぉ？」そんな会話が，聞こえてきませんか？

小学社会通信　まなびと　〔2016年　秋号〕　2016年８月31日　発行

編　集：教育出版株式会社編集局
印　刷：大日本印刷株式会社
発　行：教育出版株式会社　代表者：小林一光
発行所：教育出版株式会社
〒101-0051　東京都千代田区神田神保町2-10　電話　03-3238-6864（内容について）
URL　http://www.kyoiku-shuppan.co.jp　03-3238-6901（配送について）

なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は，科学技術の進展や国際化，情報化，高齢化などによって，今，大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で，人間や地球上のあらゆる命がのびのびと生きていくためには，人や自然を大切にしながら，共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは，この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め，社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。

北海道支社 〒060-0003 札幌市中央区北三条西3-1-44 ヒューリック札幌ビル 6F
TEL: 011-231-3445　FAX: 011-231-3509

函館営業所 〒040-0011 函館市本町6-7 函館第一ビルディング3F
TEL: 0138-51-0886　FAX: 0138-31-0198

東北支社 〒980-0014 仙台市青葉区本町1-14-18 ライオンズプラザ本町ビル 7F
TEL: 022-227-0391　FAX: 022-227-0395

中部支社 〒460-0011 名古屋市中区大須4-10-40 カジウラテックスビル 5F
TEL: 052-262-0821　FAX: 052-262-0825

関西支社 〒541-0056 大阪市中央区久太郎町1-6-27 ヨシカワビル 7F
TEL: 06-6261-9221　FAX: 06-6261-9401

中国支社 〒730-0051 広島市中区大手町3-7-2 あいおいニッセイ同和損保広島大手町ビル 5F
TEL: 082-249-6033　FAX: 082-249-6040

四国支社 〒790-0004 松山市大街道3-6-1 岡崎産業ビル 5F
TEL: 089-943-7193　FAX: 089-943-7134

九州支社 〒812-0007 福岡市博多区東比恵2-11-30クレセント東福岡 E室
TEL: 092-433-5100　FAX: 092-433-5140

沖縄営業所 〒901-0155 那覇市金城3-8-9 一粒ビル 3F
TEL: 098-859-1411　FAX: 098-859-1411